

## ポリツィアーノ『雑纂』第1集の文献学的方法

### The Philological Method in Poliziano's *Miscellaneorum Centuria Prima*

榎本 武文

ENOMOTO Takefumi

#### ポリツィアーノ『雑纂』の歴史的位置

15世紀後半のイタリア人文主義の文献学的傾向を代表する人文主義者と通例見なされるアンジェロ・ポリツィアーノ (Angelo Poliziano; Angelus Politianus, 1454-94) は、若くしてロレンツォ・デ・メディチの庇護下に入りその子供たちの家庭教師を務め、後にはフィレンツェ大学 (Studio fiorentino) の教授として詩学と修辞学を教えた (1480-94年)。現在でもポリツィアーノの主著と考えられているのが、彼が生前公刊した唯一の文献学的著作『雑纂』第1集 (*Miscellaneorum Centuria Prima*) である<sup>1</sup>。(未完の第2集の草稿は20世紀に発見され、1972年に出版された。)『雑纂』は、題名が示すとおり百篇の小論からなる、古代ギリシア・ローマ文学のさまざまな文献学的問題を扱った書物である<sup>2</sup>。形式面から言えば、それまでの人文主義

<sup>1</sup>『雑纂』は1489年9月フィレンツェ刊の初版を用いる (*Angeli Politiani Miscellaneorum Centuria Prima* (Florentiae: Antonius Miscominus, 1489). プリテイッシュ・ライブラリー所蔵本(請求番号IB.27177.))。以下の注ではこの版を *Miscellanea* と表記し、引用に際しては原文の綴字・句読点をそのまま使う。ただし、原文中の引用文には、原文にない引用符を付す。初版本に誤植があることは、奥付 (colophon) に 'Familiares quidam Politiani recognouere. Politianus Ipse nec Horthographiam se ait, nec omnino alienam prestare culpam' とあり、ポリツィアーノ自身が予想していた。出版直後に一枚刷りの正誤表 'Emendationes' が公表されたが、筆者は未見である (Vincenzo Fera は正誤表の公表の時期を1490年初めと推定している。Fera, "Il dibattito umanistico sui 'Miscellanea'", in Vincenzo Fera e Mario Martelli, eds., *Angelo Poliziano poeta scrittore filologo: Atti del Convegno Internazionale di Studi Montepulciano 3-6 novembre 1994* (Firenze: Le Lettere, 1998), p. 343)。初版本の誤植は、必要に応じて、ヴェネツィア版全集 (*Omnia Opera Angeli Politiani* (Venetiis: In aedibus Aldi Romani, 1498)) およびバーゼル版全集 (*Angeli Politiani Opera* (Basileae: Apud N. Episcopium Iuniorum, 1553)) との校合による修正が必要である。たとえば第1章で, *Miscellanea*, sig. b iiiii v-[b v] r: 'utebatur hoc ille [sc. Argyropylyus] uel maxime argumento: quod...scribat Cicero... "Quintum genus adhibet uacans nomine et sic ipsum animum entelechian appellat nouo nomine: quasi quandam continuatam motionem et perennem" sed enim nemo est (aiebat [sc. Argyropylyus]) in Aristotelis lectione paulo frequentior: quin sciat endelechian esse potius Aristoteleum uerbum' とある箇所の下線部は、1498年版に従って順に entelechian, entelechian と修正すべきことが文脈から明らかであり, *Miscellanea*, sig. [b vi] r: 'Sit argumento uel illud...quod innocentiae uocabulum negat [sc. Cicero] habere apud Graecos usitatum nomen sed habere ait posse tamen Eulabian' は (1498年版も同じ)、1553年版に従って ἀβλάβειαν と修正すべきである。片山英男「Miscellanea研究」, 『東京大学文学部研究報告: 語学文学論文集』, 7 (1982), 167-428 は、1489年版に基づくテキストと1498年版・1553年版との校合注、ポリツィアーノが引照している典拠の箇所特定、ポリツィアーノが使った古典作家の写本一覧からなるが、テキストは誤植があるために単独で使うことはできない。

<sup>2</sup> ヨーロッパ古典学史における『雑纂』の位置については、以下を参照。L. D. Reynolds and N. G.

者が主として用いていた、特定の古典を1行ずつ順に解説していく注解というスタイルを捨てて、意図的に多様で非連続的な問題をつなぎ合わせていく点がこの著作の特色であり、用いられているラテン語の文体も、多彩な古典作家から採られた膨大な語彙を利用した非キケロ主義的なものになっている<sup>3</sup>。内容と方法について『雑纂』の主要な特徴として研究者が挙げるのは、より古い写本を重視し派生写本との関係を確定すること、ローマ文学の典拠としてのギリシア文学の援用、良い写本に基づく推定によるテキストの修正である<sup>4</sup>。以下に、それぞれの特徴を表わす3つの章を選び出して、それらの内容を詳しく検討することにした。

## 第25章：写本間の関係確定

『雑纂』の第25章は「現在手に入るキケロ『近親者宛書簡集』のいかに多くの部分が混乱しているか、そしてどのような順序に並べ直すべきか」<sup>5</sup>と題されている。ポリツィアーノはまず、自分がキケロの『近親者宛書簡集』の「きわめて古い写本」<sup>6</sup>を入手したことと、この写本から派生した（ある人びとがペトラルカの手により写されたと〔誤って〕考えた）もう1つの写本に言及する。後者が前者の写しであることは、詳細は省くが多数の証拠によって明らかである、とポリツィアーノは述べている。この「きわめて古い写本」はフィレンツェ、メディチエアー＝ラウレンツィアーナ図書館Laur. 49.9 (M)であり、9世紀前半に手写されて元々ロルシュ修道院にあったことがわかっている（Mは『近親者宛書簡集』の16巻すべてを含む唯一の写本であり、現代の校訂版で最も重要な写本として扱われている<sup>7</sup>）。派生写本の方は同図書館Laur. 49.7 (P)で、1392年にコルッチョ・サルターティのためにミラノでMから手写された<sup>8</sup>。Mはその後1406年までにフィレンツェに移され、メディチ家の私的蔵書となった<sup>9</sup>。ポリツィ

---

Wilson, *Scribes and Scholars: A Guide to the Transmission of Greek and Latin Literature*, 3rd edn. (Oxford: Clarendon Press, 1991), pp. 143-146, 152-154; Anthony Grafton, "The Scholarship of Poliziano and Its Context", in Grafton, *Defenders of the Text: The Traditions of Scholarship in an Age of Science, 1450-1800* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1991), pp. 47-75.

<sup>3</sup> ポリツィアーノのラテン語の特徴については、以下を参照。Silvia Rizzo, "Il latino del Poliziano", in Fera e Martelli, *Agnolo Poliziano*, pp. 83-125. *Ibid.*, pp. 86-100には『雑纂』序言のラテン語の詳細な注解がある。

<sup>4</sup> 『雑纂』が出版された後、他の人文主義者がポリツィアーノに対して行なった攻撃については、以下を参照。Fera, "Il dibattito", in Fera e Martelli, *Agnolo Poliziano*, pp. 333-359.

<sup>5</sup> *Miscellanea*, sig. [e v] r-[e v] v: 'Caput xxv. Quam multa in Epistolis familiaribus quae nunc habentur Ciceronis praepostera: tum quem in ordinem restituendae.'

<sup>6</sup> *Miscellanea*, sig. [e v] r: 'Nactus sum Ciceronis Epistolarum familiarium uolumen antiquissimum.' ポリツィアーノが写本の「古さ」を描写するために使った形容詞と写本の実際の年代の関係についての詳細な分析は、以下を参照。Silvia Rizzo, *Il lessico filologico degli umanisti* (Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 1973), pp. 147-164.

<sup>7</sup> キケロ『近親者宛書簡集』の写本伝承については、以下を参照。L. D. Reynolds, ed., *Texts and Transmission: A Survey of the Latin Classics* (Oxford: Clarendon Press, 1983), s.v. "Cicero, 'Epistulae ad familiares'", pp. 138-142. Laur. 49.9 (M)は9世紀前半に作られてロルシュ修道院に所蔵された後、10世紀末～11世紀初めに北イタリアのヴェルチェッリに移され、14世紀末にコルッチョ・サルターティの求めに応じてミラノの書記官長パスクイーノ・デ・カペッリがヴェルチェッリで発見した (*Ibid.*, pp. 138-139)。

<sup>8</sup> Reynolds, *Texts and Transmission*, p. 139; Rizzo, *Lessico filologico*, p. 196 n. 1. 後注14も参照。

<sup>9</sup> この写本には第18章、第87章でも言及している。*Miscellanea*, sig. [d vi] v (Caput xviii): 'cum uerior scriptura maneat adhuc in libro peruetere quondam doctissimi uiri Philelphi nunc Laurenti

アーノはこの派生写本Pが「不注意な製本職人によって綴じられたために、折丁の1つが番号に合わない間違った位置にある」<sup>10</sup>ことを発見した。この写本はメディチ家の公共図書館〔サン・マルコ図書館〕に置かれている。「したがって、私が推測する限り、この1つの写本から同書簡集の現存するすべての写本があたかも水源から流出したかのように派生しているのであり、それらすべての写本において読みの順序が混乱しさらばらになっているのである」<sup>11</sup>。ポリツィアーノはこれから自分がこの混乱した順序を元に戻してみせよう、と言う。

『近親者宛書簡集』第8巻、カエリウスのキケロ宛書簡は次のように始まる（第8巻第2番第1節、以下8.2.1のように表記する）。「Certe inquam absolutus est me representante: pronuntiatum est: et quidem omnibus ordinibus: sed et singulis in unoquoque genere sententiis. Vide modo inquis」ここまでは順序に混乱はない。ところがその次の章句「Litteris ostenderis」はここまでの言葉につながらず、他の書簡のものであることがわかる（8.9.3）。ここから順に数えて24番目の書簡<sup>12</sup>の最初の言葉は「Non me hercules. Nihil unquam enim」であり、先ほどの章句にうまくつながって次のように読める。「Certe inquam absolutus est me repraesentante pronuntiatum est: et quidem omnibus ordinibus: sed et singulis in uno quoque genere sententiis. Vide modo inquis. Non me hercules. Nihil unquam enim」この書簡から10番目の書簡に到るとその最初の言葉は次のようである（8.9.1）。「Sic tu inquis Hircium?」この書簡を読み進んでいくと次の章句に行き当たる。「Si ullam spem: que simul offenderis」この章句（8.9.3）も、またそれに続く章句（9.15.5）「Aut in tecto uitii cetera mihi probabuntur」も、この文脈には異質なものとして削除しようと〔読者は〕考えるだろう。しかし、最初に誤った位置にあると述べたカエリウスの書簡の章句〔「Litteris ostenderis」〕にもう1度戻ってみれば、次のように読めるだろう（8.9.3）。「Si ullam spem litteris ostenderis」この書簡から23番目の書簡は次のように始まる（9.15.1）。「Duabus eius epistolis respondebo」そしてその終わりは〔折丁を本来の位置に戻せば〕「Si enim nihil est in parietibus aut in tecto uitii cetera mihi probabuntur」（9.15.5）と読めるのである。現在そこから10番目に置かれている書簡がそのすぐ後に置かれて、「Delectauerunt me tuae litterae」と始まるべきである（9.16.1）。

以上のポリツィアーノの記述をキケロ『近親者宛書簡集』の現代校訂版（OCT=Oxford

---

Medicis'; *ibid.*, sig. n iii v (Caput lxxxvii): 'Sed enim postea codicem illum uetustissimum Laurenti Medicis opera sum nactus quem et superius citavi minus multo quam ceteri deformatum inquinatum peruersum conturbatum.'

<sup>10</sup> *Miscellanea*, sig. [e v] r: 'Sed hic posterior quem dixi codex: ita est ab indiligente bibliopola conglutinatus: uti una transposita paginarum decuria: contra quam notata sit numeris deprehendatur.' 「製本職人」と訳した「bibliopola」は普通「書籍商」の意味で使われるが、ここではRizzoの解釈に従う。また、「折丁」と訳した「paginarum decuria」は文字通りには「5枚重ね折り」だが、Rizzoによれば、ポリツィアーノは紙の枚数に関係なく単に「折丁」という意味でこの表現を用いている。Rizzo, *Lessico filologico*, pp. 83 (bibliopola), 45 (decuria).

<sup>11</sup> *Miscellanea*, sig. [e v] r: 'De hoc itaque uno quantum coniciam cuncti plane quotquot extant adhuc epistolarum earundem codices: ceu de fonte capiteque manarunt: inque omnibus preposterus et peruersus lectionis ordo.' ルネサンス期人文主義者の用語法では、liber/volumen/codex/exemplarが区別なく「(手)写本」の意味で使われた。また、「印刷本」を指すこともあった。Rizzo, *Lessico filologico*, pp. 7, 69.

<sup>12</sup> この数字は現行版『近親者宛書簡集』の書簡番号に合致しないが、ポリツィアーノの記述をそのまま日本語に訳しておく。後出の「10番目」、「23番目」、「10番目」も同じ。

Classical Texts)<sup>13</sup>と照合しつつ説明すれば以下のようになるだろう。カエリウスのケクロ宛書簡(8. 2. 1; OCT, p. 232 l. 5) ‘Non me hercules’～別のカエリウスのケクロ宛書簡(8. 9. 3; OCT, p. 247 l. 10) ‘si ullam spem [mih]’の部分が写本Pでは1つの折丁をなしていた。この折丁が、製本職人の不注意によって、最終紙葉の裏の最終行がケクロのパエトゥス宛書簡(9. 15. 5; OCT, p. 278 l. 8) ‘si enim nihil est in parietibus’で終わる折丁の次に綴じ込まれてしまった。その結果、一方で書簡8. 2の冒頭は書簡8. 9. 3の途中(OCT, p. 247 l. 10)につなぎ合わされて‘Vide modo inquis / litteris ostenderis’という意味をなさない章句となり、他方で書簡9. 15. 5の最後の部分には書簡8. 2. 1の冒頭～書簡8. 9. 3の途中が挿入されて‘si enim nihil est in parietibus / Non me hercules’, ‘si ullam spem [mih] / aut in tecto vitii cetera mihi probabuntur’という2つの無意味な章句を生んでしまった。書簡8. 2. 1～書簡8. 9. 3はOCT版で15ページ、書簡8. 9. 3～書簡9. 15. 5はOCT版で31ページだから、2つの折丁を飛ばした位置に間違って綴じ込まれたことがわかる<sup>14</sup>。

ポリツィアーノはこの章をこう締め括っている。「私が示したこの順序を証明しているのは、2つの写本、すなわち古い写本〔M〕とそこから直接派生した写本〔P〕——これによって、その他すべての写本が製本職人の過ちで改変されていることは明らかなのだが——だけではない。日の光よりも明瞭な解釈と意味もまた証拠立てているのであり、鋭敏に見てとる人には、難解で曖昧な点のすべてが消え去るのである」<sup>15</sup>。この章におけるポリツィアーノの功績は2つある。まず、より古い写本ほどテキストの元型に近いことを明確に認識したこと。次に、写本中の折丁の置き換えという証拠を用いて、写本間の派生関係を明らかにしたこと。19世紀以降の文献学で常識となった派生写本の排除<sup>16</sup>という原則を最初に確立したのはポリツィアーノだったのである。

## 第26章：ラテン語の詩とギリシア語の詩

第26章<sup>17</sup>は「『祭暦』の詩行が葡萄の木と山羊についてのギリシア語から採られていること、そしてスエトニウスにあるやや難解なパロディ」である。オウィディウスの『祭暦』第1巻に次の詩句がある〔1. 353-358〕。

---

<sup>13</sup> *M. Tulli Ciceronis Epistulae. Vol. I: Epistulae ad familiares*, ed. W. S. Watt (Oxford: Clarendon Press, 1982).

<sup>14</sup> Laur. 49.7 (P)が1392年ミラノでパスキエーノ・デ・カペッリの指示によりLaur. 49.9 (M)から手写された際、Mは折丁ごとにばらばらにされ複数の写字生によって写されたため、MとPの折丁は正確に対応している(Rizzo, *Lessico filologico*, p. 196 n. 1)。つまり、ポリツィアーノがMとPを校合した時、綴じ込みの誤りを発見するのは容易だったはずだし、折丁の対応はPがMの写しだと判断する根拠の1つになったはずである。ブリティッシュ・ライブラリー写本Harley 2773 (G) (12世紀中頃)は『近親者宛書簡集』第1巻～第8巻のみを含むが、第8巻第9番の‘si ullam spem’(8. 9. 3; OCT, p. 247 l. 10)で途絶している(OCT, p. 247 app. crit.: ‘10 spem] hic desinit G’)。MとGの共通の祖先をなす写本がここで折丁の区切りを持っていたことを示すのかもしれない。

<sup>15</sup> *Miscellanea*, sig. [e v] v: ‘Comprobat hunc ordinem quem posuimus non solum codex uterque: uel ille antiquus uel hic ex eo statim natus a quo ceteros quoque omnis bibliopole uitio deprauatos liquet. Sed intellectus etiam sensusque ipse luce clarior sic ut acutius inspicienti quidquid usquam prorsus obscuri est ambiguique tollatur.’

<sup>16</sup> eliminatio codicum descriptorum. Cf. Reynolds and Wilson, *Scribes and Scholars*, pp. 207-210.

<sup>17</sup> この章は、原文の全文を付録として末尾に掲げた。

Sus dederat poenas: exemplo territus horum  
Palmitē debueras abstinuisse caper.  
Quem spectans aliquis dentes in uite prementem  
Talia non tacito dicta dolore dedit.  
'Rode caper uitem tamen hinc cum stabis ad aras  
In tua quod spargi cornua possit erit.'

(豚は罰を受けた。おまえはこの先例に怖気づいて、葡萄の若枝を食べるべきではなかったのだ、山羊よ。齒を葡萄の木に食い込ませている山羊の姿を見て、ある人が悲しみを声に出してこう言った。「葡萄の木を噛むがいい、山羊よ、だがおまえが祭壇に立つ時が来たら、そこからはおまえの角にふりかけられるものが生まれるだろう」)。

最後の2行は、有名とされ、学識ある人たちの口の端に上る、ギリシアの詩人のよく知られた楽しい二行詩をもとに書かれたものだろう、とポリツィアーノは述べる。「なぜなら〔オウイディウスが〕ある人がこれを言ったと書く時、詩の原作者が〔アスカロン〕のエウエノスであると明示したのに等しいからである」。ギリシア語の詩では葡萄の木自身がこう語る〔『ギリシア詞華集』9.75〕。

κῆν με φάγῃς ἐπὶ ρίζαν ὄμως ἔτι καρποφορήσω  
ὄσσον ἐπισπεῖσαι σοὶ τράγε θυομένῳ.

(おまえが私を根まで食べるとしても、それでも私は、山羊よ、おまえが犠牲に捧げられる時灌奠の酒となるのに十分な実をつけるのだ。)

ポリツィアーノは、才能あふれる詩人〔オウイディウス〕は彼に可能な限り正確にこの詩を訳しているが、にもかかわらずギリシア語原詩には詩人が十分に表現できていないものが残っている、と指摘する。率直に言うなら、ある種のギリシア的な優雅さにラテン語詩人は手が届かなかったのだが、これは豊かさに欠けるといふよりむしろギリシア語ほど戯れに適していないラテン語の欠陥によるのである。

ここでポリツィアーノは、このギリシア語二行詩に言及したついでに、スエトニウス『ドミティアヌス伝』の少しばかり難解な箇所を解釈してみよう、と言う。本題に劣らないおまけを付け加えるためである。スエトニウスには次のように書かれている〔14.2〕。「〔ドミティアヌスが〕葡萄の木を切り倒すべしという布告の執行を緩和した時、次の詩句を記した落書が流布したことがその最大の動機になったと信じられている。

κῆν με φάγῃς ἐπὶ ρίζαν ὄμως ἔτι καρποφορήσω  
ὄσσον ἐπισπεῖσαι Καίσαρι θυομένῳ.

(おまえが私を根まで食べるとしても、それでも私は、カエサルが犠牲に捧げられる時灌奠の酒となるのに十分な実をつけるのだ。)]。

葡萄の木が山羊に向けていた脅しの言葉が、ここではカエサルに向けられている。まったく見事なパロディである。というのも、剣で切り落とされようとしている犠牲獣の頭に葡萄酒をふりかけるのが古代の人びとの慣習だったのだから。たとえばウェルギリウスに次の詩句がある〔『アエネイス』4. 60-61〕。

Ipsa tenens dextra pateram pulcherrima Dido  
Candentis uaccae media inter cornua fundit.

(自ら右手に灌奠用の皿を持って、見目麗しきディドは白く輝く牝牛の両角の真ん中に〔葡萄酒を〕ふりかけた。)

つまり、皇帝ドミティアヌスが屠られることを落書はこの二行詩で予定していたのだ。スエトニウスはこう書いているからである〔7. 2〕。「葡萄酒がきわめて潤沢に供給される一方で穀物が不足した時、葡萄栽培への熱意のあまり小麦畑が蔑ろにされていると考えて、〔ドミティアヌスは〕イタリアでは何人も葡萄の苗木を植えるべからず、また属州では多くても半分を残して葡萄の木を切り倒すべし、と布告した。しかし、布告が執行されることに固執しなかった」。

章の末尾でポリツィアーノは、私がこの話題でただ1つの目的のために論議を行なったのではないことに学者たちは注意していただきたい、と念を押している。「なぜなら、現在あるスエトニウスの多くの写本には——古い写本のいくつかでさえ——このギリシア語の詩句がないだけでなく、その痕跡や詩句を入れる場所すら見当たらないのだから。しかし、私はきわめて優雅なこの詩を久しく前から〔記憶に〕留めていたために、やがて容易に、破損し欠落のあるいくつかの写本から、文字を1つ1つ考察し少しずつ見分け復元して本来の形に戻したのである」。ポリツィアーノはこの章で、ギリシア・ローマ文学の幅広い知識を誇示するとともに、ローマの詩を理解するためには典拠となったギリシアの詩を知る必要があることを指摘するだけでなく、ローマの散文においてもギリシアの詩が重要な役割を果たしていることを示している。さらに、写本の破損したギリシア語を復元している。スエトニウスの現代の校訂版では、この二行詩について、ポリツィアーノの修正がほぼ全面的に採用されている<sup>18</sup>。

## 第53章：写本に基づく推定による修正

第53章「マルクス・トゥッリウス〔・キケロ〕の『予言について』でオデュッセウスの代わりにアガメムノンの名前が書かれていること、それから話題を変えて、アッティクス宛書簡の‘*miniatura cera*’をめぐる優雅な箇所の修正および解説<sup>19</sup>では、まず、アウルス・ゲッリウ

<sup>18</sup> C. Suetoni Tranquilli *De vita Caesarum libri VIII et De grammaticis et rhetoribus liber*, ed. Robert A. Kaster (Oxford: Clarendon Press, 2016), p. 414. 校訂者は2行目3番目の語に、ポリツィアーノの修正 *Καίσαρι* (「カエサルが」)ではなく、20世紀初めの学者F. BüchelerとW. H. Alexanderによる修正 *σοί, κάπρε*, (「猪よ、おまえが」)を採用している。全写本の読みは(写本により破損が異なるが) *COI ΚΑΡΘΕ*である (*Ibid.*, p. 414 app. crit.)。

<sup>19</sup> *Miscellanea*, sig. [h vi] v: ‘Caput liii. Quod positum nomen Agamemnonis in .M. Tulli Diuinationibus pro Vlyxis est: tum in transcurso locus in epistolis ad Atticum non inelegans super *miniatura cera*

スが『アッティカの夜』で、キケロの些細な事柄に関する明らかな誤りを指摘したことと、キケロの誤りには驚かないが、間違いに彼自身も〔キケロの秘書〕ティロも気づかなかったのは驚きだ、と記したことが書かれている。というのも、キケロは〔『栄光について』で〕ホメロスの詩句〔『イリアス』7. 89-90〕をラテン語に翻訳した際に、実際にはヘクトルの言葉である詩行をアイアスの言葉だと書いているのである。ポリツィアーノは、ゲッリウスの先例に勇気づけられて自分もキケロのこれによく似た間違いを指摘しよう、と言う。ただし、この間違いが（これほど長い時間の経過の後ではありがちなことだが）写本の破損でなければの話だが。「とはいえ、きわめて古い写本にも同じ記述が見出されるし、これは文字が似ているために起きた名前のとりの違いではないのだが」<sup>20</sup>。キケロの『予言について』第2巻に次のような記述がある〔2. 30. 63〕。ホメロスで予言者カルカスは燕の数からトロイア戦争が続く年数を予言したが、キケロはホメロスのこの詩句をラテン語訳して、アガメムノンの言葉としている〔『イリアス』2. 299-300〕。もしもキケロが本当にこう書いたのだとすれば、それは事実と合致していない。なぜなら、ホメロスの『イリアス』第2巻は、この意味の詩行をアガメムノンではなくオデュッセウスの言葉としているからである。

しかし、こうしたことがキケロにさえ見られることに憤ったり驚いたりするべきではない、キケロの著作にはこの種の記憶違いがいくつもあってアッティクスやブルトゥスが注意し訂正していることが、彼の書簡集によってわかるのだから。たとえば、『リガリウス弁護演説』のルクウス・クルシディウスに関する誤りをキケロは自分の間違いであると認めているが、記憶違いだと言っている〔『アッティクス宛書簡集』13. 44. 3〕。また、『弁論家』〔9. 29〕ではキケロはアリストパネスの代わりにエウポリスと書き、その後アッティクスがエウポリスをアリストパネスに訂正した。そうしたわけで、キケロは時折、自分の文章は多くの箇所が彼〔アッティクス〕の赤鉛筆による訂正を必要としているのではないか、と言っているのである。

ポリツィアーノはここで、「赤鉛筆」*‘miniata cerula’*で思い出したという事柄に話題を転じて、ついでながら『アッティクス宛書簡集』の最後から2番目の巻にある次の箇所を修正し解釈しなければならないと書いている（15. 14. 4）。ここには〔流布写本では〕次の誤った読みが見出される（下線は筆者による付加）。*‘His litteris scriptis me ad syntaxis dedi: quae quidem uereor ne nimia tua pluribus locis notandae sint: ita sum meteoros: et magnis cogitationibus impeditus.’*ポリツィアーノはこれを *‘Ne miniatura cera tua pluribus locis notande sint’*と修正すべきだとして<sup>21</sup>、以下のように解釈している。キケロは著述に専念したが、重大な事柄を考えて上の空であるために、しばしば訂正者として用いていた宛名人アッティクスの赤鉛筆で文章の多くの箇所が訂正されるべきではないかと恐れている。現代の人間がするように、アッティクスはキケロが十分推敲していない箇所に朱を入れるのが常だったのであろう、と。

次にポリツィアーノはさらに先へ進んで、より良い写本の読みとその修正を提示する。最初はフランチェスコ・ペトラルカが所有していたとされ、次にコルツィョ・サルターティの手に

---

correctus et enarratus.’

<sup>20</sup> *Miscellanea*, sig. [h vi] v: ‘Quamuis etiam in antiquissimo quoque libro non dispariliter scriptum inueniamus: nec sane lubricus ex litterarum uicinitate sit in alterutrum nomen lapsus.’

<sup>21</sup> ‘nimia’は‘minia’の文字の入れ替えによる誤写、‘tula’は後続する‘tua’と類似する文字列の反復による脱落、‘cera’はこれら2つに挟まれたことによる脱落、が破損過程についてのポリツィアーノの推定と思われる。

渡り、さらにレオナルド・ブルーニ、ドナート・アッチャイウォーリと、それぞれの時代を代表する学識ある人びとのものだった写本<sup>22</sup>には、'ne miniata ceruia tua'とある。「ここでもし、最後から2番目の単語の最後から2番目の文字を頂点から少しばかり伸ばすならば、つまりiをlに変えるならば、疑いなくあらゆる破損をとり除くことができるだろう」<sup>23</sup>。しかし、流布写本においてさえ同書簡集最終巻(16. 11. 1)に'Cerulas enim tuas miniaturas illas extimescebam'とあることから、疑わしい点はすべて消え去るだろう。推定によるテキストの修正はそれまでの人文主義者も行なっていたが、ポリツィアーノの方法の新しい点は、推定・修正を行なう際の慎重さと写本の古さ・価値に対する評価である。古い写本に対して恣意的な修正を加えてはならないというポリツィアーノの考えは、ペラゴニウスの古い写本の写し(フィレンツェ、リッカルディアーナ図書館1179)を作らせた際末尾に書いた注記(subscriptio)に明確に示されている。「それから〔ポリツィアーノ〕自身が原本と校合して忠実に〔誤写を〕訂正したが、ただし原本からは何1つ変更を加えず、破損した箇所を発見してもそのままにしておき、決して自らの判断を差し挟むことはしなかった。この方針を先人たちが守っていたならば、われわれははるかに誤りの少ない写本を手に行っていることだろう」<sup>24</sup>。

以上で分析したのは『雑纂』のわずか3章だが、ポリツィアーノの文献学者としての方法の主な特徴をある程度明らかにすることができたのではないかと思う。最後に、入手の簡単な現代校訂版の存在しない『雑纂』第1集から、ポリツィアーノのラテン語の文体を例示する目的も兼ねて、第26章の原文を再録しておく。

## 付録：第26章の原文

*Angeli Politiani Miscellaneorum Centuria Prima* (Florentiae: Antonius Miscominus, 1489), sig. [e v] v-[e vi] v:

[e v] v] Caput xxvi.

Versiculi in Fastis e Greco super uite et Capro: tum parodia quaequam obscurior apud Suetonium.

<sup>22</sup> フィレンツェ、メディチエア=ラウレンツィアーナ図書館Laur. 49.18 (M)。キケロ『アッティクス宛書簡集』の写本伝承については、以下を参照。Reynolds, *Texts and Transmission*, s.v. "Cicero, 'Epistulae ad Atticum, ad Brutum, ad Quintum fratrem'", pp. 135-137. Laur. 49.18 (M)は1392/93年にミラノでサルターティのために手写されたもので、ペトラルカ所蔵説は誤りである (*Ibid.*, p. 137)。

<sup>23</sup> *Miscellanea*, sig. i i v: 'Quod si penultime dictionis penultimam litteram pollulum [paululum 1498] a summo produxeris hoc est de .i. littera .l. feceris omne proculdubio mendum sustuleris.' なお、'miniatura'と'cerula'はそれぞれ'miniata'と'cera'の指小形で、基本的な意味に違いはない。

<sup>24</sup> Reynolds and Wilson, *Scribes and Scholars*, pp. 145-146: 'Hunc librum de codice sanequam vetusto Angelus Politianus, Medicae domus alumnus et Laurenti cliens, curavit exscribendum; dein ipse cum exemplari contulit et certa fide emendavit, ita tamen ut ab illo mutaret nihil, set et quae depravata inveniret relinqueret intacta, neque suum ausus est unquam iudicium interponere. Quod si priores institutum servassent, minus multo mendosos codices haberemus. Qui legis boni consule et vale. Florentiae, anno MCCCCXXXV, Decembri mense.' Cf. Rizzo, *Lessico filologico*, pp. 177-178.

[[e vi] r] Ouidius in primo Fastorum.

Sus dederat poenas: exemplo territus horum  
Palmitē debueras abstinuisse caper.  
Quem spectans aliquis dentes in uite prementem  
Talia non tacito dicta dolore dedit.  
'Rode caper uitem tamen hinc cum stabis ad aras  
In tua quod spargi cornua possit erit.'

Nimirum hi duo uersiculi de Greci poetae disticho perquam inclyto festiuoque facti: quod in primis celebre fertur: et uolitat docta per ora uirum. Nam cum dixisse quenpiam illa memorat ipsum nimirum auctorem carminis Euenum digito designauit. Loquitur autem in Grecis uersiculis: uitis ipsa sic scilicet.

κῆν με φάγῃς ἐπὶ ρίζαν ὄμως ἔτι καρποφορήσω  
ὄσσον ἐπισπεῖσαι σοὶ τράγε θυομένῳ.

Vertit hos nimirum quam potuit ad unguem poeta ingeniosissimus: et sunt tamen in Greco nonnulla quae noster parum enarrate. Quin si ueris concedendum transmarinam illam nescio quam Venerem ne attigit quidem noster. Quod uitium linguae potius minus lasciuiantis quam parum copiosae. Sed quoniam in Greci huius distichi mentionem incurrimus afferamus etiam quod apud Suetonium in Domitiano est ut obiter illi quoque non inobscuro loco lucem interpretationis inferamus: uelutique auctarium demus merce ipsa ne utiquam uilius. Verba igitur ita sunt. 'Ut edicti de excidendis uineis propositi: gratiam faceret: non alia magis re compulsus creditur: quam quod sparsi libelli cum his uersibus erant.

κῆν με φάγῃς ἐπὶ ρίζαν ὄμως ἔτι καρποφορήσω  
ὄσσον ἐπισπεῖσαι Καίσαρι θυομένῳ.'

Quod enim supra uitis capro minitabatur hoc eadem nunc Cesari: pulcherrima hercules parodia. Vel 'si me' inquit 'ad radicem comederis tantum tamen uini producam: quantum immolando Cesari possit infundi'. Mos enim ueteribus uti capitibus stantium sub ictu cultroque uictimarum uinum infunderetur: Sic apud Maronem uidelicet.

[[e vi] v] Ipsa tenens dextra pateram pulcherrima Dido  
Candentis uacce media inter cornua fundit.

Igitur neci Domitianum Cesarem per hos uersiculos libelli destinabant: quoniam ut Suetonius idem scribit: 'ad summam quondam ubertatem uini: frumenti uero inopiam: existimans nimio uinearum studio negligi arua: edixit ne quis in Italia nouellaret: utque in prouinciis uineta succiderentur: relicta ubi plurimum dimidia parte: nec exsequi rem perseuerauit'. Meminerint

autem studiosi nos in hoc inuento non uno dumtaxat nomine in commune consuluisse: quoniam in plerisque adhuc Suetoni codicibus etiamque nonnullis ueteribus non modo Grecos hos uersiculos non inuenias sed ne uestigium quidem ac ne locum etiam quo se recipiant. Sed eos nos quoniam tenebamus iam pridem: utpote lepidissimos: facile mox de obsoletis mendosisque exemplaribus singulas pensitando paulatimque nunc agnoscendo nunc restituendo litteras peruestigauimus.

(一橋大学大学院経済学研究科准教授)